

島根県における豚熱防疫戦略と野生いのしし感染状況

島根県家畜病性鑑定室

○伊藤寛人 加地紀之

豚熱は豚やいのししに対して強い感染性と致死性を持ち、平成 30 年に国内で発生して以降全国に感染が拡大。R4 年 5 月、島根県西部に飛び地して初めて野生いのししの豚熱感染を確認。島根県では飼育豚にワクチンを安定して 2 回接種する体制を早期に構築することで豚場の防疫を徹底しながら、野生いのししでは豚熱に感染することで早期に集団免疫を獲得させる戦略を実施。そのため経口ワクチンは感染拡大の遅延化を目的とした帯状散布ではなく、養豚場の防御効果を重視した養豚場周囲を囲む散布方法を実施。県内猟友会やジビエ施設と連携することで、ジビエ施設への指導とジビエ流通に向けた検査、および年間を通して県内全域の野生いのししの感染状況を適切にモニターできる検査体制を事前に構築。R3 年から R6 年までに、野生いのしし 2,024 頭の遺伝子検査、1,059 頭の血清抗体検査を実施。結果、感染は県西部から東部に向け年約 130km のペースで拡大。県西部では、R5 年 12 月には抗体保有率が 67%以上となり、R6 年 9 月以降遺伝子陽性個体は未検出。またこの間、県内養豚場では豚熱検出されていない。本県の取組は、地域内の豚熱ウイルス量を一時的に増やしてしまうリスクはあるものの、野生いのししでの豚熱感染を早期に鎮静化（清浄化）させ、結果として養豚場での豚熱を防除できる方法であることを示唆。